

主題研究

# 実践的コミュニケーション能力を育てる 英語科の指導に関する研究

オーセンティックなコミュニケーション活動につなげる文法指導をとおして

（第2報）

教科領域教育室 三 浦 隆

研究協力校

花巻市立湯本中学校

## 研究の概要

この研究は、文法指導とコミュニケーション活動を関連付け  
けた指導をとおして、実践的コミュニケーション能力を育成す  
る指導の在り方を明らかにしようとするものである。

今年度中学校で行った指導実践では、「本質」をとらえた文  
法理解とその文法知識を実際に活用するための段階的なコミュ  
ニケーション活動を関連付けながら指導し、オーセンティック  
なコミュニケーション活動につなげた。また、コミュニケーション  
を支える基礎的能力を培う指導も授業の中に位置付けた。

授業実践の結果を検討したところ、コミュニケーションの際  
に生徒が使用する英語について「適切さ」「流暢さ」「正確さ」  
に高まりが見られた。

キーワード：中学校英語 文法指導 実践的コミュニケーション能力  
オーセンティック コミュニケーション活動

## 研究の目的

英語科におけるすべての指導は、本来、実際のコミュニケーションに生かすことを目指して行われている。しかし、これまでの指導を振り返ってみると、文法規則や語彙、音声などを、それぞれ別個の知識や技能として習得させていて、実際のコミュニケーションの場面でそれぞれの知識・技能をどう生かせばよいかを指導することについては十分ではなかったのではないかと考える。これらの散在する知識・技能をコミュニケーションのための体系化された知識に変えていくことが必要である。

そのためには、文法指導とコミュニケーション活動を関連付けながら指導することが重要である。特に文法指導においては、意味や形態にのみ重点を置いた指導ではなく、言語の使用場面や言語の働きの中から文法をとらえさせることが大切である。さらに、このような文法知識を生徒が実際に活用できるように、よりオーセンティック(authentic)なコミュニケーション活動をとらえて総合的に指導することが必要である。

そこで、この研究は、オーセンティックなコミュニケーション活動につなげるような文法指導の工夫改善をとらえて、実践的コミュニケーション能力を育成する指導の在り方を明らかにし、中学校英語科の学習指導の改善に役立てようとするものである。

## 本研究の手だての概要

まず、昨年度立案した本研究の基本構想に基づき、手だての概要について説明する。

【図1】は、本研究における指導の手だてである「本質」をとらえた文法理解と、段階的なコミュニケーション活動の内容を示したものである。

段階的なコミュニケーション活動の分類	プレ・コミュニケーション活動 (定着を図るための活動)		コミュニケーション活動 (活用を目指すための活動)	
	文型練習	疑似コミュニケーション活動	機能的コミュニケーション活動	社会的相互活動
活動のねらい	・目標とする文法項目を使用した表現に何度も触れ、意味と形態の定着を図る	・文型練習した表現を、相手と情報をやりとりする活動の中で使用させながら定着を図る	・目標とする文法項目の使用が想定される場面を与え、目標表現と他の表現を学習者に自分の判断で使い分けさせる	・これまで学習してきた文法知識等を総合的に使用させる
活動の概要	・基本的な構文や表現を繰り返し練習する	・会話例を与えるなど、活動で使用する表現を限定し、目標とする表現を正しく使用できるよう練習する	・ある場面を想定し、自分の現実の興味や判断に基づいてコミュニケーションを図るために、自分で表現を選択して活動する	・教室の中だけにとどまらず、現実の世界につながっていくような、本物性の高い活動である
活動例	・パターン・プラクティス ・Q & A 等	・information gap を利用したゲーム等	・タスク活動 ・Show & Tell 等	・ビデオレター作り ・メール交換 等

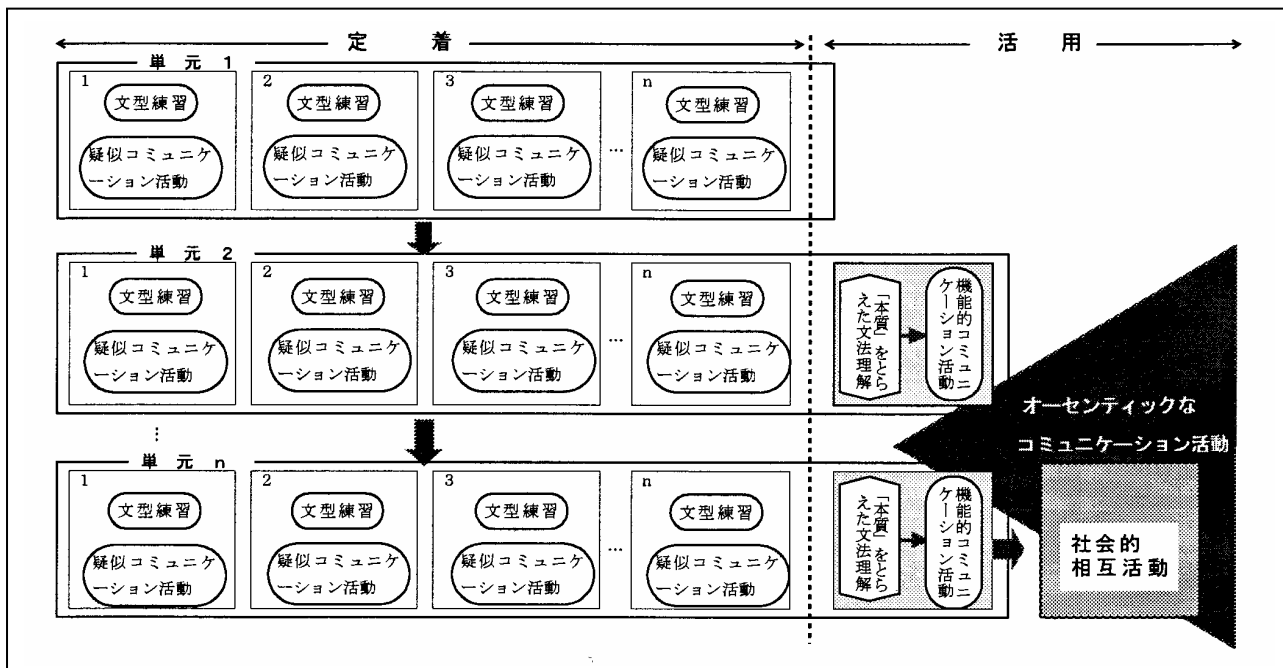
それまでに学んだ文法知識を整理することにより、言語の使用場面と働きを考えながら、コミュニケーションで使える知識へと再構築を図る

オーセンティックなコミュニケーション活動

【図1】 「本質」をとらえた文法理解と段階的なコミュニケーション活動

生徒に実践的コミュニケーション能力を身に付けさせるためには、特定の形態がいかなる場面でどのような意味・働きをもつのかという「本質」を、他の文法項目と比較しながら理解させる必要がある。そして、実際にその知識を活用させる活動を設定することが必要である。自動車の運転になぞらえれば、学科で得た運転技術に関する知識を、教習所のコースで徹底的に反復練習し、さらに路上での実地訓練で実際の場面に応用できるような総合的な訓練を積むということである。【図1】で言えば、コース内の練習がプレ・コミュニケーション活動、路上訓練がコミュニケーション活動に当たる。

そして、【図2】のように、学期に1回程度、「英語を使う必然性」「自己関与感」「伝達する意味内容への焦点化」を要件とする社会的相互活動(オーセンティックなコミュニケーション活動)を設定する。この活動につなげるように複数単元にわたって計画的に指導することにより、頭の中で理解した「本質」を「運用」に結び付けることが可能になると考えた。



【図2】 各学期の指導計画の構造

ただし、これまで述べてきたような指導は、コミュニケーションを支える基礎的能力が伴うことにより効果を発揮する。本研究においては、この能力を「語順などの基本的英文構造の知識」「基本的語彙の知識」「音声技能」「方略的能力」の四つととらえ、これらを培うために必要な指導を継続的に行うことが必要であると考えた。以下 ~ に、その具体的指導の工夫をあげる。

- 1、2、3、4という番号を付けた箱を用いて英文を作るという英文構造・語順にかかわる指導を行う。
- パラグラフ内の前後の文の連続性に着目し、シーム(文の書き出しの部分)から文の内容を予測しながら読む指導を行う。
- コロケーション(語と語の結び付き)を意識した語彙指導を行う。
- 関連のある語をネットワークのように組み合わせる単語練習シート(本研究では「ボキャネット・シート」と称する)を使用し、継続的に指導する。
- フォニックス(綴り字と音声の関係の規則)を利用した指導を継続的に行う。
- 語強勢や弱化、リズム等、英語独特の音に慣れるため、映画や音楽などの英語の一部分を聞き取る練習を行う。また、教科書の音読の際にそれを生かして指導を行う。
- 聞き返しや言い換えなど、方略的能力に関わる表現を加えた対話例の練習をさせそれらの表現に慣れさせる活動(本研究では「ASAP(As Soon As Possible)活動」と称する)を継続して行う。
- 身近な話題について文の正確性よりも内容のふくらみと流暢性を大事にさせる英語会話活動(本研究では「ブリーフ・トーキング」と称する)を継続して行う。

指導実践の内容及び実践結果の分析・考察

1 指導実践の概要

研究協力校の3年生1クラスにおいて指導実践を行った。実践の期間は平成15年8月下旬から11月上旬である。ここでは、授業での文法理解とコミュニケーション活動の様子を中心に取り上げる。

(1) 不定詞の「本質」をとらえた文法理解

不定詞の「本質」をとらえた文法理解を図った授業の概要について次頁【資料1】に示した。

【資料1】 to不定詞の「本質」をとらえた文法理解を図る授業の概要

1 本時の目標

- (1) to不定詞の「本質」を理解する。
- (2) toを含む様々な表現を使って、疑似コミュニケーション活動に取り組むことができる。

2 本時の展開

段階	学習内容	生徒の活動 / 指導内容	生徒の様子(観察)・感想等	
導入	1 ASAP 活動	・隣同士のペアで2分間、シートの会話例を練習する (88頁【資料5】参照)	会話例の一部を抜いたシートでも、ある程度スムーズに取り組むことができる生徒がでてきた。	
	2 プリーフ・トーク	・設定した話題について、ボキャネット・シートを用いながら、ペアで2分間、英語で会話する (88頁【資料4】参照)	活動に慣れてきて、大分意思疎通がスムーズになってきたが、1分を過ぎると話題が途切れてしまうペアもまだ多い。	
展開	3 「本質」をとらえた文法理解(不定詞)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・以下の内容から to のイメージを確認する</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>I go ( ) school by bus. 私は 行く 学校(へ) バスで                      I'll give this book ( ) Mary. 私は あげる この本を メアリー(に)                      Please tell me the way ( ) the station. 教えてください 私に 道を 駅(への)                      to のもつ本質的な機能(意味)は「方向(行き先・到達点)」を示すということである</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次のような場面を想起する</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>秋晴れの日、お父さんが庭で落ち葉を一生懸命掃いています。落ち葉たきをしようというのです。額にはうっすら汗をかいています。30分ほどせせと落ち葉を集め、ようやく火を付けると、縁側から、家の中にお母さんに「おーい、水」と声をかけました。すぐにお母さんが水を持って現れました。…さて、みなさんは、お母さんはどのような水を持ってきたとイメージしましたか?</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・上記の内容を英語で表現する場合を考える</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>toの後に動詞がくる不定詞の場合も「その動作に向かう」という意味ととらえる                      I want some water ( ) drink. 私はほしい 水 飲む(という動作に向かう)                      I want some water ( ) put out a fire. 私はほしい 水 たき火を消す( )</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な不定詞表現も同様に考える</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>I want <u>to</u> play tennis. 私は望む テニスをする                      I have no time <u>to</u> play tennis. 私には時間がない テニスをする                      I went to the park <u>to</u> play tennis. 私は公園へ行った テニスをする                      He told me <u>to</u> play tennis. 彼は私に言った テニスをする                      They don't know how <u>to</u> play tennis. 彼らは知らない どのように テニスをする                      It is fun for me <u>to</u> play tennis. (それは)楽しい 私が テニスをする</p> </div>	<p>約3分の2の生徒がコップに入った水をイメージしたが、残りの生徒はバケツに入った水を想像した。</p> <p>to のもつ「 」のイメージを使って、「どんな動作に向かっているのか」を表現すればよいことが確認できた。</p> <p>to play tennis がどれも「テニスをする」で表現されているが、指名された生徒はどういう意味を表すのかを理解して訳すことができた。</p> <p>会話例を参考に取り組んでいるので to を用いることはできている。示された情報に合わせて例文を適切に直すことができない生徒への支援が必要である。</p>	
	4 疑似コミュニケーション活動	・「私のオススメの場所は？」という information gap を用いた会話練習に取り組む		
	終末	5 練習問題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習シートの練習問題に取り組む</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>次の文はどういう意味かを考え、英語に直す                      (例) 私たちは よく 行く その店 買う 服を(clothes)                      We often go to that store to buy clothes.</p> </div>	矢印の意味をとらえること、の部分で to を用いることはどの生徒もできたが、英文にする際に単語がわからなくてできない生徒が多かった。
		6 学習記録の記入	・今日の学習内容、疑問点、感想について記録シートにまとめる	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒のコメント例</li> <li>・toの意味がわかった</li> <li>・わかりやすかった</li> </ul>

「注」   は、学習シートや板書の内容、   は教師による説明である。

## (2) ALT へのお薦めスポット紹介の活動

今回の実践で取り上げた to 不定詞だけではなく、既習事項を総合的に活用させることを目指したものがこの活動である。83 頁【図 1】の段階的なコミュニケーション活動で言えば、最終段階の社会的相互活動に当たる、オーセンティックなコミュニケーション活動である。次頁【資料 3】に、生徒が実際に ALT に紹介活動を行った授業の概略と、その際の生徒と ALT のやりとりの様子の一部を示す。

次頁【資料 3】に示したコミュニケーションの様子を見ると、S<sub>1</sub>S<sub>2</sub>とも、活動に没頭して取り組んでいることがわかる。Q & A の内容も、自分たちの紹介する温泉のよさを売り込もうと、ALT の質問に適切に回答しているのがわかる。また、わからないことを聞き返したり、うまく伝えられないことをジェスチャーや図で表現したりするなど、上手に方略を用いて会話を持続させている。発話された英文や理解の内容については、十分に正確とは言えないまでも、コミュニケーションを図る上での大きな問題とはなっていない。

お薦めスポット紹介の発表部分の英文は事前に準備させたものだが、to を用いた表現が二カ所に出てきている。どちらも正しい to 不定詞の用法にはなっていないが、「to ~ を用いることで、to の前に示した内容について、to ~ の後に続く動作・内容に向かっていくという説明を加える」という to の本質をとらえて、自分なりに実際に使ってみたと考えられる。

このように、英語の学習で取り組んだ一つ一つの表現や文法事項は、今回の「ALT へのお薦めスポット紹介」のようなオーセンティックなコミュニケーション活動をとおして、実際にコミュニケーションを図るために生徒に活用させる中で、誤用法と正用法を繰り返しながら、「自分で使える表現」として身に付けられていくと考える。

## (3) コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導の概略

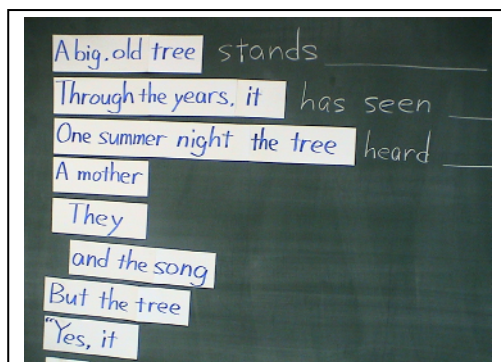
今回の実践でコミュニケーションを支える基礎的能力を培うための指導を次のア～ウについて行った。その指導の概略について、学習シート等を示しながら以下に簡単に紹介する。

### ア 英語の語順に関する指導

最初に、日本語の文章は語句の順番を入れ替えても意味が通じるのに対し、英語は語順を入れ替えると意味が変わったり変な英文になったりすることを確認した。

次に、【資料 2】のように、英文の書き出し部分（主語まで）を紙板書し、その後続く内容を想起させながら読み取りの指導を行った。文の連続性や書き出し部分の情報をもとに内容を予測しながら英文を読み進んでいくことで、英語を語順通りに理解していく練習になる。日本語と違い、主述が先に来て、後から説明が加えられていくという英文構造を生徒に意識させることができる。指導の後半では、紙板書部分だけを残して、続きの部分を再生していくという「暗唱」に挑戦させた。

### 【資料 2】語順指導の紙板書の様子



単元のまとめには、ボックスを使った語順指導を行った。これは、1 (主語)、2 (動詞)、3 (1、2 以外に必要な語)、4 (説明の語句) という四つの番号を付けた箱を用意し、日本語をいったんその箱に当てはめてから英文を考えていくものである。語順を意識させる指導を繰り返し行うことによって、生徒が英語の語順に慣れていき、より正確な英文を作れるようになることをねらったものである。




【資料3】 本実践における社会的相互活動に取り組んだ授業の概要

1 本時の目標

(1) 3分間の発表とQ & Aをとおして、ALTに自分のお薦めスポットを伝える。

2 本時の展開

段階	学習内容	生徒の活動 / 指導内容	生徒の様子(観察)・感想等
導入	1 本時の活動のすすめ方と目標の確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すすめ方と目標(評価の観点)を確認する</li> </ul>	
		<p>以下の観点で他グループの発表についても評価しシートに記入する</p> <p>ALTに伝えよう、わかってもらおう、楽しんでもらおうとする姿勢が発表や応答の中に表れていたか</p> <p>オリジナルな内容、興味を引く内容で、実際に行ってみたいと思わせるような、わかりやすく魅力的なものになっていたか</p> <p>発表や英語での応答がスムーズで、上手にコミュニケーションできていたか</p>	
	2 各グループの発表とQ & A	<ul style="list-style-type: none"> <li>・10グループから、それぞれ3分間で発表とQ &amp; Aを行う</li> <li>・他グループの発表やQ &amp; Aの様子を見て、学習シートに相互評価を記入する</li> </ul>	<p>教師は発表の様子をVTRに録画し、後で適切さ、流暢さ、正確さについて検討を加える。</p> <p>生徒が適切さや正確さを自分で評価するのは難しい。</p>
展開		<p>S<sub>1</sub>: We know a good place to health. The place is this!</p> <p>S<sub>2</sub>: This! (ALTに手書きの地図を渡し、場所を指で示す)</p> <p>T: Oh.</p> <p>S<sub>1</sub>: The place name is MISUIKAN. Price, 400 yen.</p> <p>S<sub>2</sub>: Oh, very cheap!</p> <p>S<sub>1</sub>: You must take bath towel and hand towel.</p> <p>S<sub>2</sub>: Because it isn't putting up there. But a rinse, a shampoo and soap are put.</p> <p>After out of the bath to eat ice cream. It's very good.</p>	<p>2カ所に to を用いた表現が見られる。ただし、どちらも正しい用法とは認められない。</p>
展開		<p>T: Uh, is MISUIKAN your favorite onsen?</p> <p>S<sub>1</sub>: Yes.</p> <p>S<sub>2</sub>: Yes.</p> <p>T: O.K. Why?</p> <p>S<sub>1</sub>: Uh..., very very ...Ah!(両手をあげて伸びのマネ ~ relax を表現)</p> <p>T: You said to eat ice cream after onsen. What kind of ice cream?</p> <p>S<sub>1</sub>: Hum, vanilla.</p> <p>T: Vanilla. (S<sub>2</sub>にも返事を促すジェスチャー)</p> <p>S<sub>2</sub>: And Chocolate.</p> <p>T: Chocolate. O.K. Uh, in the Onsen, what can I eat other than ice cream.</p> <p>S<sub>1</sub>: ... GARIGARIKUN...? One more, please.</p> <p>S<sub>2</sub>: Pardon?</p> <p>T: In the onsen, you said I can eat. What can I eat?</p> <p>S<sub>1</sub>: Uh, ... NANDEMO ...</p> <p>S<sub>2</sub>: Everything.</p> <p>T: Everything. O.K. Uh, what is the best way to get there?</p> <p>S<sub>1</sub>: Get ... ?</p> <p>T: Or what is the best way to go?</p> <p>S<sub>1</sub>: Uh. ...</p> <p>S<sub>2</sub>: Daytime.</p> <p>T: Hum. What time does the onsen close?</p> <p>S<sub>1</sub>: Uh. ... Twenty thirty.</p> <p>T: What time does it open?</p> <p>S<sub>1</sub>: Ten o'clock.</p> <p>T: Ten o'clock. O.K.</p>	<p>上は温泉を紹介するグループの発表内容、下がそのグループのALTとのQ &amp; Aの内容である。</p> <p>S<sub>1</sub> S<sub>2</sub>が生徒、TがALTの発話。「...」は3秒以内の沈黙を表している。制限時間はとおして3分である。</p>
展開			<p>Q &amp; Aで質問に答える生徒</p> 
			<p>この発話は、ALTの way to go を when to go に聞き間違えたために、このような応答になったと推察される。</p> <p>このように、正確さについては不十分などところも多く見られるものの、適切さや流暢さについてはある程度満足できる応答になっている。</p>
終末	6 学習のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ALTとJTEからコメントをもらう</li> <li>・活動の反省を学習シートに記入する</li> </ul>	<p>生徒のコメント例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・結構伝わって楽しかった</li> <li>・質問が聞き取れなかった</li> </ul>

「注」 [ ] は、学習シートの内容、 [ ] は手だてや発話内容についての解説である。

イ ポキャネット・シートを用いた語彙指導とブリーフ・トーキング

コミュニケーションで使用する語彙を補充するため、【資料4】のようなシートを準備し、トピックを設定して生徒に記入させた。ト

ピックから連想した語彙を記入させることで、コミュニケーション活動の際の話題の広げ方を補助したり、実際の言語使用場面と関連をもたせながら語彙を学習させたりするというねらいがある。

このシートを用いて、授業開始時の2分間、話題を決めてペアで会話活動を行ったのが、ブリーフ・トーキングである。細かなミスを恐れず、英語だけでお互いの伝えたい内容を理解し合うことを目標とした。話題には、後で行うALTへのお薦めスポ

ット紹介の活動につながるように花巻にちなんだ内容を選び、話題を膨らませるために、ボキャネット・シートに各自が記入した語句等を積極的に利用するよう指導した。また、うまく内容が伝わらない場合でも、あきらめずに、後述のASAP活動に登場する方略（聞き返し、言い換え、ジェスチャー等）を用いながら、何とか伝え合う努力をするよう挑戦させた。

### ウ ASAP 活動

これも、授業開始の2分間、ペアで取り組んだ。【資料5】のようにコミュニケーションの際によく用いる表現をちりばめた会話シートを用いて、できるだけ速く読み進めることで、次第にそれらの表現が口になじみ、とっさの場面でも口をついて出るようになることをねらったものである。

### 【資料5】 ASAP 活動に用いた学習シート（抜粋）

「あなたのきょうだいは？」～わからない言葉があっても会話を続けるために…

制限時間内に、役割を交代しながら、何度も読んでみよう  
慣れてきたら、シートを見ないでもすらすら言えるように練習しよう

My brother likes animals.	僕の兄は動物好きでね
<b>Oh, does he?</b> ◀	<b>へえ、そうなの</b>
He is a college student.	大学に通ってるんだ
<b>Uh-huh.</b> ◀What does he study?	<b>ぶ～ん、何勉強してんの</b>
He wants to become a \$#&¥.	になりたいんだって
<b>Sorry?</b> ◀Say it again, please.	<b>え？ もう1回言ってくれる</b>
A veterinarian.	「ベタリネリアン」
<b>What is it?</b>	<b>何、それ？</b>
Uh... It's <i>a kind of</i> doctor...	う～ん、医者みたいなもので
<b>You mean</b> a doctor for animals?	<b>動物の医者ってこと？</b>
Yes, <b>exactly.</b> ▶	そう、その通り
O.K. <b>Go on.</b> ▶	わかった。それで？

このように、聞き返しや言い換え、相づち等の「方略的能力」にかかわる表現を多く取り入れ、口になじませる。  
～までの表現があり、慣れてくると2分間で4回以上繰り返すことができる。英文の一部を削っても全体に話の流れがあるので、慣れればすらすら言える。

## 2 実践結果の分析・考察

### (1) インタビューテストの内容

### 【資料4】 実践で用いたボキャネット・シートの生徒記入例

英語科学習シート No.3 H15.8.27

ボキャネットシート 1 ～「温泉」

3年A組 No. 氏名

○ トピックから連想する単語を記入しよう  
○ 単語からフレーズ、文へと発展させよう  
○ シートに記入した単語やフレーズを使って、トピックについて英語で話そう  
○ 会話で新たに知った語句を追加しよう

追加する単語・フレーズ等

「温泉」というトピックから連想する語句を自分で記入する。さらにそこから連想する語句という様に、網の目状に広がっていく。  
このシートを利用しながら、ブリーフ・トーキングやALTとのQ&Aを行っていく。実際に活動で使う語彙を練習することで、実際の使用場面のイメージを伴った「使える語彙」の習得を目指している。

トピック「温泉」 onsen (hot spring)

健康にいい good for the health  
温泉は面白い Bath is very interesting  
温泉は泳ぐにはいい Bath is must not swim.  
健康 health  
温泉は清潔 clean  
温泉は気持ちいい Pleasant  
温泉は洗う wash  
温泉は新鮮 fresh  
温泉は自然 open-air bath  
温泉はきれい clean  
温泉は気持ちいい Pleasant  
温泉は洗う wash

温泉の楽しみ方-資料5が  
Which onsen do you like the best?

実践的コミュニケーション能力の育成状況を見取るため、研究協力校の実践対象クラス 34 名の生徒に対し、下の内容のインタビューテストを事前（8月27日）と事後（11月17日）に実施した。インタビューはALTと1対1で行った。制限時間は1分である。

あなたは学校新聞の担当者です。新聞の記事にするために、次のような内容について、ALTのロバート先生に英語でインタビューしてください。

- 自分の中学校生活の様子を話したり、ロバート先生の中学校時代の話聞き出したりする。
- その中で、それぞれの中学校の様子で違うところを見つける。
- そしてその違いについて、ロバート先生に説明し、感想を聞く。

(2) インタビューテストの結果の分析・考察

インタビューテストにおける生徒一人一人のコミュニケーションを図っている姿を、【表1】に示した評価の指標で見取った。レベルは数が多い方が上位で、レベル5まで設定した。

【表1】 実践的コミュニケーション能力の育成状況を見取る評価の指標（抜粋）

	適切さ	流暢さ	正確さ
規準	場面や話題にそって、適切な語彙や文を用いて会話を行ったり、相手の意図を理解して適切な応答や反応をしたりできる	コミュニケーションにおける障害を乗り越え、不自然な沈黙や不要な繰り返しを避けて、スムーズに会話ができる	英語の音声に十分に慣れ、正しい語句や表現を用いて、正確に内容を伝えたり、相手の発話を聞き取ったりすることができる
観点	<ul style="list-style-type: none"> <li>文や語彙、表現の選択が適切である</li> <li>相手に対する応答・反応が適切である</li> <li>話題や文の内容が適切である</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>聞き返し等の方略を自然に使用している</li> <li>表情や身振りが自然である</li> <li>発語数が豊富で沈黙が少ない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>語順や文構造が正確である</li> <li>正確な語を使用している</li> <li>正確な音声で話す・聞く</li> </ul>
レベル1	<ul style="list-style-type: none"> <li>Nice to meet you. 等の型にはまった挨拶、発話、質問、応答はできるが、話題にそって内容のある話をするのは難しい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手の働きかけにもなかなか反応することができない</li> <li>沈黙が続き、表情などで伝えようとする様子もあまり示さない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>不正確な発音が多くコミュニケーションが著しく妨げられる</li> <li>文の構成が出来ず、言語による意思の伝達は困難である</li> </ul>
レベル2	<ul style="list-style-type: none"> <li>話題にそった話をしようとするが、非常に限定された語彙と文型の中でのみ話す</li> <li>相手に質問しても、応答されたことに対応して自分のコメントを述べたりすることは難しい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>単純な会話をゆっくり話したり話してもらったりすれば、単語レベルの理解を示したり部分的には通じるところがある</li> <li>相手のジェスチャーや繰り返し等の援助をかなり必要とする</li> <li>かなり不自然な長い沈黙を間に挟むことがしばしばある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>おおそ正しい発音だが教師やALTに聞き返される語句がある</li> <li>文の構成能力に危ういところがあり、言い表し方に相当の援助を必要とするが、身近な話題ならば発話や応答ができる</li> </ul>
レベル5	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己の事実に応じた表現をするために、限られた範囲であるが、語彙や文を選択して話せる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>まとまった談話を、途切れずに話すことができる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>既習の表現については、ほぼ正しい運用が可能である</li> </ul>

インタビューテストの結果が【表2】である。18人の生徒がプラスの変容を示している。

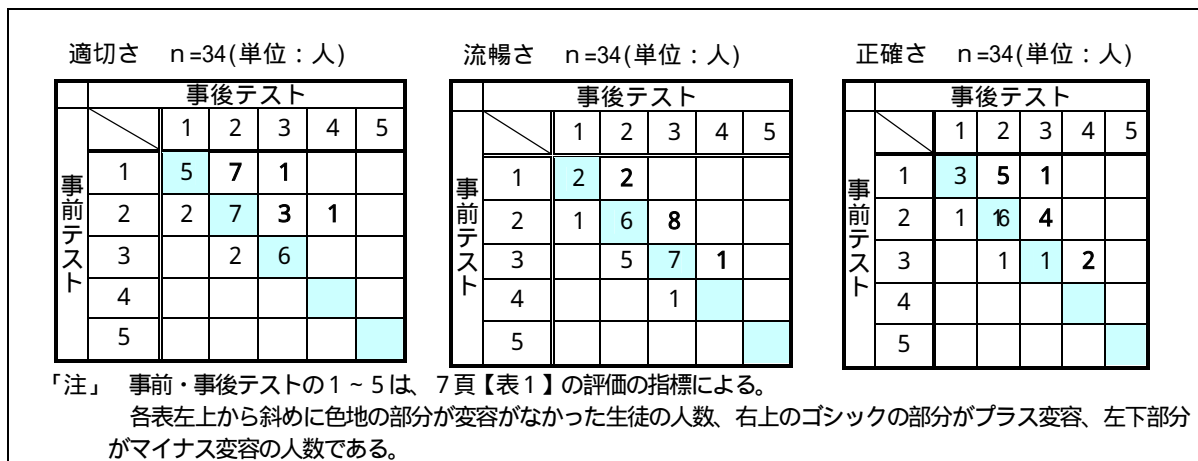
【表2】 インタビューテストの結果

		n=34 (単位:人)																	
生徒 No.		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
適切	前	1	2	1	1	3	2	2	2	2	1	1	1	2	2	2	1	1	1
	後	3	4	2	2	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1
流暢	前	2	3	2	1	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1	1
	後	2	3	3	2	4	3	3	3	3	3	2	2	3	3	3	2	2	1
正確	前	1	3	1	1	3	2	2	2	2	2	1	1	2	2	2	2	1	1
	後	3	4	2	2	4	3	2	2	3	2	2	2	2	2	2	2	1	2
生徒 No.		19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34		
適切	前	3	3	1	3	3	2	2	1	1	3	3	2	1	3	2	2		
	後	3	2	2	3	3	2	2	1	1	3	3	2	1	2	1	1		
流暢	前	4	3	3	3	3	3	3	2	1	3	3	3	2	3	3	2		
	後	3	3	2	3	3	3	3	2	1	3	2	2	1	2	2	2		
正確	前	2	2	2	3	2	2	2	2	1	3	2	2	1	2	2	2		
	後	3	3	2	3	2	2	2	2	1	3	2	2	1	2	2	1		

「注」 1 生徒 No. は検証のために便宜上付けた通し番号である。  
 2 適切さ、流暢さ、正確さそれぞれについて、上段が事前テストの結果、下段が事後テストの結果である。それぞれの欄の数字は【表1】の評価の指標で示したレベルに対応している。  
 3 大きく2段になっているのは、上段のNo. 1～18がプラス変容の生徒、下段の生徒は変容が見られなかった生徒やマイナス変容が見られた生徒、プラスとマイナスの変容が混在する生徒ということで分けた。

さらに、適切さ、流暢さ、正確さの視点から全生徒の変容状況を見たものが【図3】である。





【図3】 適切さ、流暢さ、正確さから見た生徒の変容状況

前頁【表2】から、半数以上の生徒がプラスに変容しており、実践後のコミュニケーションの姿に高まりが見られるのがわかる。【図3】からも、適切さ、流暢さ、正確さ、それぞれにプラスの変容が見られた生徒が10名以上いることがわかる。特に流暢さについてはレベル2からレベル3への変容が最も多く、事後テストではクラスの半数の17名がレベル3以上になるなど、高い数値を示している。

一方、適切さや正確さはレベル1からレベル2への変容が多く、プラス傾向ではあるものの十分に満足いく結果とは言えなかった。特に正確さについては、事前事後で変容が見られなかった生徒が20名おり、事後テストの結果がレベル3以上となった生徒も8名と全体の2割強にとどまっている。

### (3) 抽出した個別生徒のインタビューテストの分析・考察

このインタビューテストの結果について分析・考察を更に深めるため、二人の生徒のインタビューテストを取り上げ、次頁【資料6】に示す。すべての生徒について同じようにインタビューテストの分析を行ったが、この二人の生徒の状況がクラス全体の特徴をよく表している。

この二人の分析結果に表れている特徴の考察から、次のようなことが言える。

まず、流暢さの内容を事前・事後のインタビューの様子から見てみると、沈黙の回数が減ったり、沈黙の間に“Hum...”などの間投詞を挟んだり、目線や表情で訴えようとしたりするなど、何とかインタビューを続けようという姿勢が多く見られた。発語数も増えており、英文を（形は不完全でも）口に出して相手に伝えようとしている。これは、ASAP 活動やブリーフ・トーキングで口にした表現をインタビュー場面でも再現できたことや、オーセンティックなコミュニケーション活動をとおして英語で伝え合う活動に慣れてきたことが流暢さの高まりにつながったことによるものと考えられる。

次に適切さについては、話題にそって会話を自分なりに膨らませたり、ALTの反応に自分の感想やコメントを付け加えようとしたりする姿が多くなってきたものの、内容や場面にふさわしい語彙や表現を選択する姿は今回あまり見られなかった。1分間というインタビュー時間も、発話の適切さを見るためには十分ではなかったと考える。

正確さについては、本実践で「本質」をとらえた文法理解を図った to 不定詞を使った表現が出てきたり、事前よりも過去形の疑問文の正しい使用が多くなったりしたものの、語順の乱れや動詞の欠落等に目立った改善は認められなかった。実践で授業者が適切さ、流暢さに焦点を当てた指導を行ったため、正確さについて生徒に十分に意識させていなかったことが要因として考えられる。

### 【資料6】 生徒A、生徒Bのインタビューテストでの発話内容とその分析結果

	事前(8月27日実施)	事後(11月17日実施)		事前(8月27日実施)	事後(11月17日実施)
生徒Aのインタビューテストでの発話内容	S: My name is _____. T: Nice to meet you. S: Nice to meet you. ...I like baseball. T: Oh, you like baseball. S: と.... T: What do I like? S: What do I like? T: Oh, what do I... You ask me what do I like. S: ... T: I like soccer. S: Soccer. T: Yes, just...(ワークシートを指して) ask S: ask... T: About... S: Hum...(8秒) T: Ask about school events. S: School event? T: We have many ah assemblies...	S: I am _____. T: Ah. S: Nice to meet you. T: Nice to meet you. (握手をする) S: I present. (カードをALTに渡す) T: Ah, thank you very much. S: I am glad to meet you. T: I'm glad to meet you, too. S: Do you like volleyball? T: Volleyball? Yes, I like volleyball. S: Hum...America is strong. T: In volleyball? S: Volleyball. T: (手のひらを揺らして) A little, a little. S: Woo...(7秒) Do you like to play soccer? T: Yes, Soccer is my favorite sport. S: Favorite sport. T: Yes. S: Soccer ...Um...Hum...	生徒Bのインタビューテストでの発話内容	S: My name is _____. T: Oh, nice to meet you. S: Nice to meet you, too. と.... Have you many brothers? T: Many...? S: Brother. T: No. S: Sister? T: Zero. S: ... T: (指で輪を作って)Zero. S: Zero. ...(5秒) School lunch? T: School lunch. Didn't me?... Junior highs in America have school lunch? S: Yes. T: Yes, they do. We would usually or get to eat pizza. S: No Pizza. T: No. America, pizza. In America we eat pizza for lunch. S: んと...club activity. (activityの発音が不自然) T: Very good. Club activities. We have things like soccer,...	S: My school.. interesting, but study... difficult. What did you junior high school interesting? T: Um, in my junior high school, it was interesting, ah, the different classes we could take, like social studies, science, history, math,.... S: Thank you. ...(5秒) Did you like food? T: Food? Yes, I do like food.

「注」 Sが生徒、TがALTの発話。「...」は3秒以内の沈黙を表し、3秒を超える沈黙は「(秒数)」で示している。

		事前テスト結果の分析	事後テスト結果の分析
生徒A	適切さ	あいさつ以外に自分から発話することはほとんど出来ていない。自分の好きな野球の話題から始めようとしたが、「I like baseball.」の後が続かなかった。(レベル1)	テレビで見たバレーボールの試合から、ALTの好きなスポーツへと話を膨らまそうとしている。ただ、ここでも、部活動の様子など、インタビューの課題に迫る内容まではたどり着けていない。(レベル2)
	流暢さ	ALTの援助的発話をオウム返しに繰り返している。単語レベルは理解しているようだが、沈黙も多く、目線もそらしがちである。(レベル2)	自信をもってALTとかかわろうとしている。自分から発話する文が増えている。沈黙は頻繁に出てくるが、間につなぎの言葉を入れたり、目線を投げかけたりするなど、会話を継続させようとする様子が見られ、不自然さが無くなってきている。(レベル3)
	正確さ	自分で文を作れない。ALTの「What do I like?」をそのまま繰り返してしまうなど、発話の内容を正確にとらえて会話しているようには見えない。(レベル1)	まだ、文の構成能力は十分ではない。二つある疑問文はどちらも「Do you ~?」で始まるものだが、「Do you like to play soccer?」とto不定詞を使用するなど、文構造に幾分高まりが見られる。(レベル2)
生徒B	適切さ	あいさつをした後、兄弟の話をしようとしたが、ALTに兄弟がいなかったため続かなかった。その後、単語レベルで質問を繰り返してはいるが、話題のつながりはほとんど見られない。(レベル2)	自分の学校生活についてコメントを述べてから相手の話を聞き出そうとするなど、話題のすすめ方に工夫が見られる。お礼の言葉もよかった。インタビューの課題としては、日本の教科選択などもう少し話題を膨らませる必要がある。(レベル3)
	流暢さ	会話はあまり途切れていないように見えるが、質問項目を並べているだけで、自分から発することができた語数はそれほど多くない。(レベル2)	自分から発話する文が増えている。沈黙は幾分増えたが、自分の発言する内容を考えている間であり、不自然さはそれほどない。言い直しや繰り返しもない。(レベル3)
	正確さ	単語のみの会話が多く英文の構成能力はあまり見られない。ALTに発音を聞き返されたり、昼食のピザを日本の給食のことと聞き違えるなど、音声面の正確さにやや欠ける。(レベル2)	疑問文で「Did you ~?」のように過去形を用いるなど、変化も若干見られるが、語順の乱れや動詞の欠落などがあり、文の構成能力は、まだまだ十分とは言えない。(レベル2)

## 研究のまとめ

本年度の研究の結果、明らかになった成果と課題は以下のとおりである。

### 1 研究の成果

- (1) 言語の使用場面や言語の働きと結び付けて「本質をとらえた文法理解」を図ることと「段階的なコミュニケーション活動」で定着と活用の練習を行っていくという「文法指導」を段階的・継続的に行うことは、生徒が学習した文法事項や表現を単に知識として身に付けるのではなく、自分の表現活動の中に自然に取り入れて使うようになることに効果があることがわかった。
- (2) 上記のような文法指導の最終段階として、コミュニケーション活動の本物性を高めた「オーセンティックなコミュニケーション活動」に生徒を取り組ませることは、単に表現形式に慣れるための活動とは異なり、これまで身に付けた知識を総合的に使用させる練習となり、コミュニケーションの適切さ、流暢さ、正確さのうち、特に流暢さや適切さの一部を高める上で効果があることがわかった。
- (3) 「コミュニケーションを支える基礎的能力を培う指導」を授業の中に位置付けて、継続的に指導を行うことは、コミュニケーションの適切さ、流暢さ、正確さを高める上で効果があることがわかった。特に、流暢さを高める指導として ASAP 活動への取り組みが有効であることや、ブリーフ・トーキングとボキャネット・シートを使った指導が生徒に話題にそって話を膨らませようとする意識を育て、コミュニケーションの際の適切なやりとりへとつながっていくことが確かめられた。

### 2 今後の課題

- (1) 特に正確さについて高まりが得られるように、「定着」を意識したコミュニケーション活動を工夫したり、生徒が誤った発話をした際のフィードバックの方法について検討を加えたりする必要がある。

以上のことから、正確さを高める指導の在り方に改善を加える余地はあるものの、オーセンティックなコミュニケーション活動につなげる文法指導は、中学校英語科の指導において、実践的コミュニケーション能力を育てる上で有効な手だてであることが確かめられた。

### 【参考文献】

Littlewood, W., *Communicative Language Teaching*, Cambridge University Press, 1981.

岩手大学教育学部附属中学校研究紀要第7巻第2集, 「楽しく夢中になる授業」, 1994

高島英幸編著, 「実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導」,  
大修館書店, 2000

大内由香里, 「不定詞・動名詞の導入」英語教育2月号, 大修館書店, 2001

吉田研作・柳瀬和明, 「日本語を生かした英語授業のすすめ」, 大修館書店, 2003

### 【参考ホームページ】

Tawashi's Room こんな英語の授業、やっています <http://www.iris.dti.ne.jp/~takazawa/>

坂下町立坂下中学校 坂中生のための英会話表現集 <http://www.takenet.or.jp/~sakachu/>